

武蔵野の景観

ある日の昼下がり。「万葉集に、武蔵野は月の入るべき山もなし草より出でて草にこそ入れ、という歌はありますか？」と万葉図書・情報室の方が聞きに来られた。頭をフル稼働するが、



多摩川の夕景(東京都多摩市)

残念ながら心当たりがない。それもそのはずで、万葉百科システムを検索しても該当歌が出てこない。そこで『万葉集』にはない歌ということはおわかったが、そうするとこの歌はいったい何なのか、なぜ『万葉集』の歌と限定されて質問がきているのか、など疑問がつきない。

結論からいうと、この歌は「武蔵野は月の入るべき嶺もなし尾花が末にかゝる白雲」(『続古今和歌集』)を本歌取りした江戸時代の歌であった。しかも江戸時代に古歌として流布していたため、いつしか『万葉集』の歌と勘違いされてしまったと考えられる。『万葉集』は言わずと知れた現存する日本最古の和歌集であるため、古い歌＝万葉集というイメージが持たれるのだろう。

武蔵野とは武蔵野台地のことで、中央に狭山丘陵があり、北に入間川、北東に荒川、南に多摩川が流れる地帯のことである。『万葉集』巻十四には東歌として武蔵国の歌が九首収められているが、そのうちの五首に武蔵野という地名が詠まれており、万葉ひとにとつて

武蔵野は武蔵国を代表する風景であったことがうかがえる。

恋しきは 袖も振らむを 武蔵野の
うけらが花の 色に出なゆめ

(巻十四―三三七六)

恋しくなったら袖を振ろうものを。

武蔵野のウケラの花の色のようにおもてには出さないでよ、けっして。という秘めた恋を詠んだ歌がある。

近世の美術工芸品において、武蔵野はススキや月といった秋の風景として意匠化されている。そのため、武蔵野の原野といえはススキをイメージされる方も多いだろう。ところが『万葉集』には武蔵野のススキを詠んだ歌はなく、前述のようにウケラ(現在のオケラ)の花が詠まれる程度である。

今、かつて『万葉集』に詠まれたウケラの花が咲く武蔵野を見ることはできない。あるいは江戸時代に詠まれた広大な草原を見ることがも残念ながらかなわない。どのような景観だったのか、大きなビルや駅を眺めながら思いを馳せたい。

(万葉文化館主任技師・小倉久美子)